もうがまん出来ない

給料分割遅配に憤る憎しみの声

勇退者募集が思わしくいかなかつたということで会社は「今月支給する給料を分割払いしたい」「八月からの賃金は資金繰りのメドがつかずに遅配になる」と組合に申入れている。また、新聞でもさかんにPRを効かせて「期末手当などとても考えられない」など述べて組合員の間に恐怖の種をまきちらしているが、この会社の出方を組合員、主婦はどうけ取つているか、編集部では炎天下の一日探訪をこころみた。

六月二十九日内払い支給日。三川人事横には、内払い分を受取ろうと主婦たちはごつた返している。正常な給料日まではとうてい待てないほど、われわれの家計は追いつめられているのだ。

そそくさと金を受取り日除で封を切つて金高を調べている四十年配の主婦にまず当つてみた。

「どけんなりまつしよか。三井さんのツブるるとは思いませんばつてん、新聞では毎日書き立てていますし、心配でなりません。分割払いや遅配になるとまた金融から借らにゃならんし、借金苦になることは分りきつとります」と顔をくもらせて心配顔だ。

この会話を聞いていた隣の主婦も話題の中にさつそく引込まれた。生命にさえ関することだから、主婦の耳は真剣だ。

「毎日毎日うちの主人は判コでも押したように出勤しています。ほんとにこんなに暮くなると気の滅入ります」と、この人は心配を通りこして、経営者の無能ぶりに唾でも吐きかけるような憎しみをこめて語つてくれた。

施設をたたき売れ

午後三時すぎになると主婦たちは夕食の仕度くで目の回るほど忙しい。四山売店附近は買物姿の主婦たちが一番増えるころだ。

買物姿のAさん「大丈夫でしようか。私たちはこうなつたら組合が何よりの頼りです。会社の意図はこういう不安にかり立てて組合員の気持をバラバラにさせ、組合を骨抜きにしようとしているのではないでしようか。こんどは首切りは必らずくるものと私たちは覚悟をあらたにして、闘いに立向かわねばならないと思つています」

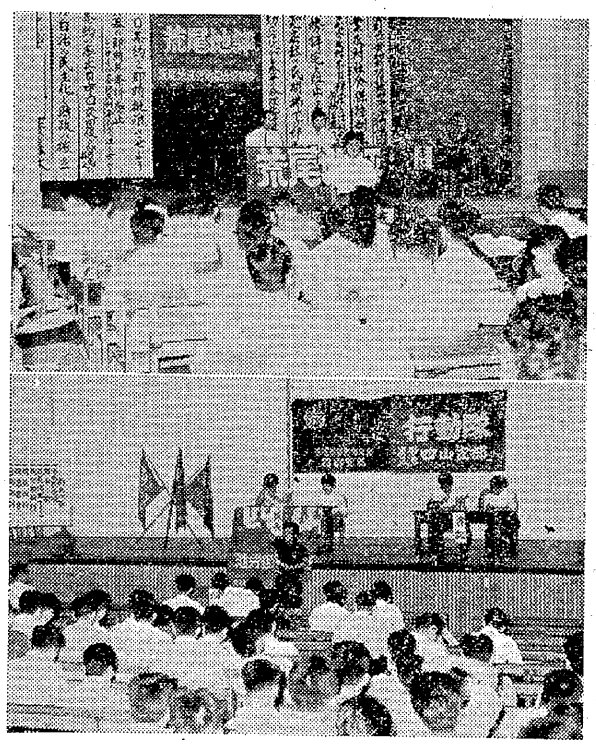
一番方帰りの仕繰夫のOさん「全くでたらめ過ぎるよ。給料は出さん、炭は掘つてくれとはよくいえたものだ。彼らは労働者を牛馬にさえ見ている。会社の不用施設やまだ換金されるものはいくらでもあるではないか。ほんとうに金がないなら、そういうものをたたき売つてでも給料に変えるような真心を見せてくれ。会社のいうことは嘘で固めていることを、これまでいやというほど身にこたえているから、どうしてもこんども本当に受取れない。この際、組合は徹底的にあらゆる戦術を駆使して闘つてほしい」

「闘うのみです」

坑外のKさん「昨夜も女房とこんどのことで話合つたが、結論は出ず何にもならなかつた。結局、私たちは組合を中心として、ガツチリ団結を固めること以外にないのではなかろうか。ただ、心配なのは、こういうことで組合員、家族の不安を募らせたら会社の思うツボだと思う。組合ではこれに対する憎悪をなるべく回数を多く職場地域でやつてもらいたいことが、急務だと思う」

また、七輪の火を起していた主婦のYさんは、団扇の手を止め「何て会社はダラシないのでしようねいつそういうことなら、経営を組合に任せたらどうでしよう。自分たちが儲けているときは黙つていよいことばかりして、こういう時だけ、責任を労働者にも押しつけてくる。全く馬鹿馬鹿しい話ですよ。給料が遅配するとなると、私のうちでは親子五人が日干しになります。組合でしつかり闘つて下さい。私たち主婦も固まりますし絶対闘いが長引いても悲鳴はあげません」

と、探訪した範囲では不安のうちにも、皆がそれぞれ決意を固めていることが頼もしく思われた。



（上）荒地評の総会、挨拶する酒井政治局員　（下）西山行動隊の総会と意見発表

組織強化を推進

第五回荒地評定期大会

荒地評では第五回定期大会を去る六月二十八日午前十時より、荒尾市労働会館でひらいた。

インターナショナル合唱で大会は幕を明け、会長挨拶、来賓祝辞のあと、萩嶋事務局長より経過報告がおこなわれた。

このあと議事に入り、今年度の運動方針がつぎのように決定され、これにもとずいてこんごは強力な闘いを起こすことになつた。

まず、荒尾市の特殊な立場として農家はほとんど零細農家であり、失業者や生活保護者などが激増している。このことは労働者の賃上げ、労働条件向上闘争に大きく支障をきたしているが、これは全国的な問題で政治的に解決しなければならないが、とくに労働者と農民がその原因を話合うことが重要である。荒尾では幸い農家一戸から一人以上の就労者を出しているこれに注目して、こんごは労働者農民の話合いを押すすめて、実のある提携を推進する。

つぎに、中小企業の振興として市当局からの積極的資金援助対策、モデル商工地帯の設置、それとともに消費者の協力と理解をはかつていく。

また、組織強化のため(1)家族組織地域組織を確立し(2)サークルを育成強化し交流を図る。青年婦人部を充実させ学習により討議を重ねまた交流をさかんにする。

労働者の福祉対策、革新市政をのばすためにこんご市民の納得の行くように働きかける。などがきめられた。

夏季文芸の募集

不況に負けぬ作品を

今年も恒例の夏季文芸を募集いたします。

暑さや、会社の不況宣伝に負けず立派な作品を寄せてください。

文芸によつて他の組織に三井の闘い、三池の闘いを認識してもらいひとりでも多くの同志を得て統一闘争を組みたいと思います。

こんど選者はなるべく近くの人でいつでも指導できる方を選び協力してもらうことにしました。

選者を知つていただくため若干の紹介をさせていただきます。

創作選者　荒木精之

明治40年生れ、日大史学科卒、昭和13年4月熊本で「日本談議」を創刊、今日に至つている。著書には「青年作家」「環境と血」「神のような女」「菊池武時」「ある未発の事件」などの小説集があり、特に「肥後民話集」は文壇の注目をあびた。

昭和34年5月熊日社会賞を受賞熊本地方の多数の文化教育団体の指導的位置にある。

詩選者　出海溪也

一九二八年生れ。法大日本文学科卒。大牟田在住で現在映文協事務局長。「詩と詩人」「列島」の同人。

詩集として「世界解放詩集」「日本前衛詩集」「わが祖国の詩」などがある。

プロレタリア文学詩の流れではなくアバンギャルドの方だが、現実的にはその詩の中にはプロレタリアの流れが音高く響いている。

現在映文協で発行している「文化タイムス」などによく執筆しているが、とくに詩人としてもまた批評家としても大牟田地方での重鎮の存在である。

〝実行動を起そう〟

各支部で行動隊の総会

本所、三川を除く各支部では殆んど行動隊の総会を終り、新らしい行動方針のもとに活動を展開しようとしている。

宮浦支部では各支部より一足早く執行部改選前の五月初旬に開催、つづいて四山支部が六月二十八日港務支部七月一日、製作支部二日がそれぞれ終了した。

三川支部は新隊員を一般に募集していたが来る十二日に開催の予定本所支部では各職場ごとに開催していたが、支部一本としての総会は、三鉱労組行動隊の総会と併行して行うことにしている。

昨年度の諸闘争には新編成による行動隊の活躍は大いに評価され、とくにロック・アウトで示した活動ぶりや、地域活動での連絡、情報活動に、大きな力を発揮している。

昨年度にひきつづき、ことしは組織の存亡をかけた闘いが展開されようとしているおりから、こんご行動隊が組織の中核として闘争推進を実践することが各隊の方針で打出されているのが注目され、かつ期待されている。

去る二十八日四山講堂でおこなわれた四山行動隊の総会では、隊員から意見発表がおこなわれたが、それぞれ「いまこそ各職場で地域でわれわれは階級意識に目覚めて組織の尖端で実行動を起さねばならない」と述べられていた。

（写真は四山支部での総会と、意見発表する隊員）

三鉱Aが優勝

労組対抗の庭球大会

大牟田労政事務所、大地評主催の労組体育大会では、三鉱労組チームは、卓球にひきつづき、二十八日おこなわれた庭球でも初の優勝をとげた。

労組庭球大会は炎天下の二十八日に大牟田地区の十四単産が参加して午前九時から、小浜コートで試合を開始した。

照りつける炎天の下で試合は午後六時半までもつづき、終日熱戦をくりひろげたが、三鉱労組Aチームは順当に勝ちすすみついに初の優勝をとげた。

試合は十四チームをABCの三パートに分け、リーグ戦の方式。Aパートでは三職、三鉱Bが残り、Bパート三鉱A、栗田、Cパート三爽、三川がそれぞれ決戦トーナメント（敗者復活戦）に進出した三鉱Aは三職を3対0、三川を3対0と降し、さらに決勝戦では栗田を3対1と破つて、堂々の優勝を勝ち得た。

映画

愛の鐘

少年少女の非行化防止をテーマとした社会ドラマ

ハイティーンの目に余る行状ぶりが再び世間の注目の的となつたラジオ国際のアナウンサー大木のり子（春川京子）は彼等の実態を探ろうと盛り場へ実況録音に出かけた。

盛り場をねぐらに自由奔放に暮れ廻るハイティーンの行動は、のり子の想像を遥かに絶したものであつた。が、のり子の心を強く引付けたのは、不良少年の世界に今にも足を踏み入れようとしている少年達であつた。そういう少年達の中に川辺定男（手塚茂夫）と添森武（秋山由紀雄）がいた。

定男は父由松（森繁久彌）の無理強いで都内随一と評判の高い梧桐高校に入つたものの、猛烈な詰込み勉強に自信を失い学校をサボルようになつた。そんな定男の気持を露も知らない由松は、定男の教育を憂おくみ（沢村貞子）に任せきりでパチンコ屋の商売に熱中している。

添森武は性の悪い義母がいる田舎の家を飛び出し東京に来た。そして叔母の家に養女に来ている実妹フサ子（二木てるみ）にだけ会うと、夢にまで見た球場後楽園へ出かけていつた。しかし、武は球場の前に屯ろしているグレン隊に捉まり、脅迫されそうになつたところを、スリから足を洗つた立花正一（頭師孝雄）に助けられる。正一は宿のない武を自分の掘立小屋につれていつた。

こういう心の安定を失つた少年達を再びもとの楽しい家庭に引戻そうと「愛の鐘」運動が全国に広がつていつた。この運動の指導者田上町子（乙羽信子）は青少年不良化防止に命をかけ毎日奔走していた。娘の圭子（幸田良子）は仕事々々と忙がしく出歩く町子に内心不満を持つていた。圭子は町子と別れた父山北（千秋実）にこつそり会つては淋しさをまぎらせていた。

翌朝、正一の掘立小屋を辞した武があてもなく町をさまよつているところを叔母のお玉に見付かつてしまう。武は叔母の家へ連れいかれ、こんこんと説教された。

その夜、武は田舎に帰されるのを怖れて暗闇の中へ逃げ出したが、運悪くグレン隊の喧嘩のまきぞえをくつて警察に連行された。

一方定男はグレン隊のたむろしている盛り場へ出入りするようになつた。定男は学校へ行く気は全然起きなかつた。そんなある日、定男の担任教師（佐伯徹）が定男の身を案じて訪ねてきた。

定男が学校に行つていないことを知つた由松は逆上して定男をぶん殴つた。（8日より太陽館で）

7月のこよみ

【1日】労働安全週間
【2日】ユネスコ加盟記念日
【3日】第三十二臨時国会会期終了
【5日】名古屋相撲場所開幕
【6日】抗議行動　中央委員会
【7日】七夕
【12日】平和行進到着　花火大会　大牟田祇園まつり
【14日】フランス革命記念日（パリ祭）
【15日】日共創立記念日
三池・荒尾海水浴場開やぶ入り
【16日】土用入り　海の記念日
【20日】経済白書発表（企画庁）
【21日】みなとまつり
【23日】
【30日】土用うしの日

日	月	火	水	木	金	土
中	中	中	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	中

＝七月のことば＝

パリ祭

七月十四日、パリ祭の夜。どつたがえす銀座のあるバーで寄いグループが「フランス革命万才！」とグラスをあげて乾杯した。と、これを聞きつけた女給の一人が「せつかくの楽しい夜に〝革命〟なんてオツカナイこといわないでよ」とマユをしかめた、という話がある。この女給さんパリ祭がフランス大革命の記念日であることをご存知なかつたのだ。もつとも、その女給さんをだいてパリ祭の歌などを放歌していた連中もまた同類だつたかもしれない。

一七八九年のこの日、バスチーユ監獄の襲撃に始まつたフランス大革命は、絶大な権力をほしいままにしていたルイ十六世の封建的ブルボン王朝をうち倒し、近代的な自由・平等の共和制を樹立した。革命はヨーロツパ全土に大きな波紋をよび、封建制打倒の機運をひろげた。ブルジョア革命の典型的なものとされている。いらいフランス人はこの日をパリ祭として、大革命の精神をたたえている。